「生活を 生活で 生活へ」
さながらの生活と教育

語り手　堀合　文子（H）
聞き手　佐治由美子（S）

●倉橋惣三の教え子として

今回のインタビューは、倉橋先生の教えを受け、幼稚園で六十年を超える実践を続けてこられた堀合文子[注1]先生に、倉橋の思い出を語っていただこうという企画です。聞き手の佐治は、三十年ぶりの再会でしたが、八十八歳になられた堀合先生は、以前の印象とお変わりなく、そのしゃんと伸びた背筋と柔らかい物腰、そして、にこやかな笑顔は当時のままでした。

S　先生は、女高師（東京女子高等師範学校、現お茶の水女子大学）を一九三九（昭和十四）年三月にご卒業ということですが、保育実習科で倉橋先生の講義をお受けになられたのですよね。

H　ええ。でも、入学は一九三八（昭和十三）年四月ですから、一年間だけ。（修業年数が）二年になったのは、戦後のことじゃないかしら？　その時、倉橋先生が講義をなさったのは、ほんのわずかですよ。ほとんどが休講でしたから……。お話をうかがったのは、夏の講習とかでした。

そうおっしゃって、堀合先生は一冊のノートを取り出し見せてくださいました。それは、達筆でつづられた倉橋惣三講義録の堀合版？　でした。戦後、幼稚園保母の再教育[注2]のために行われた認定講習の会場で、園長としてではなく講師としての倉橋から保育を学び、その時に書き留めたノートを、堀合先生はいまでも大切に手元に置かれているご様子でした。

H　講義は、黒板の前を行ったり来たりなさって、「遊びはね……」って、遊びのことを一時間。詩みたいな言葉でぱっぱっとおっしゃって、それで一時間過ぎちゃう感じでしたね。でも、それを受けたのは数回で、ほかは休講。戦争も戦争でしたし、先生はいろんな点でお忙しかったのでしょう。板書しながらの講義ではなくって、短い言葉で語っていかれる授業。受けている側は、あははと笑っているうちに授業が終わっちゃった、そういうことをよく覚えています。そのころは、お講義というふうにはとらずに、私たちが集中できるようにお話ししてくださっているというように感じていました。なので、ノートは後でまとめたものかもしれません……。

倉橋の教え子と称されてきた堀合先生が女高師で倉橋の教えを受けたのはたった一年間であったこと、そして、その一年間の授業も休講が多く、ほんの数回しか講義を聴くことはできなかったというお話をうかがい、私は驚きを禁じ得ませんでした。そこで、女高師の附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）に奉職されてからの八年間が、倉橋の附属幼稚園主事（園長）時代と重なっていることから、園長としての倉橋を語っていただくことにしました。

H　いまの園長先生のように、われわれと話をなさるような立場ではなかった。主事室に座っていらっしゃることはわかっていましたが、お話をするようなことではなかったのです。ごあいさつはしますけれどね。

S　（遊戯室前で子どもたちの遊び相手をしている倉橋の写真を見せながら）たまにお子さんと遊ばれ

ることはおありだったのですよね。

H　お子さんと遊ばれることはありました。だからといって、われわれがおそばに行くということはなかった。それぞれ自分のクラスの子どものことがありますでしょう……。ただ、今日はいらしてる、ってそんな感じでしたね。

堀合先生は、確かに長い期間を倉橋のもとで過ごされたのでしたが、実際には講義を聴かれることも少なく、仕事の場でも直に教えを受けるようなことはほとんどなかったとのこと。この点は、昭和初期の女高師の附属幼稚園保母が倉橋と共同研究を行ったその様子[注3]とは大きく異なっています。

堀合先生が倉橋主事のもとで附属幼稚園に務められたのは昭和十六年からの八年間ですから、大戦前後の最も厳しい社会状況の中での保育を、まさに命がけでひたすらに守る日々であったと思われます。また当時、倉橋は、戦局が悪化する中にあって自由主義者として政府から厳しい目を向けられながら、文部省（現文部科学省）に何度も足を運んで、幼稚園存続のために力を尽くしました。

そして戦後は、教育刷新委員会のメンバーとなって新しい教育制度の樹立に貢献し、さらに女高師が新制大学に移行する際には学部組織問題に真っ向から取り組むなど、多忙を極める日々を過ごしていました。そのようなことを考え合わせると、この時期は、倉橋にとっても、保育について幼稚園で語り合うような穏やかな時代ではなかったことが察せられます。

その中で堀合先生は、コツコツと保育実践を積み上げながら、疑問を感じると講義録を開いたり倉橋の著書を繙（ひもと）いたりして、まさに「考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ」[注4]の日々を過ごしておられたのでしょう。

▲聞き手　佐治由美子

●生活を 生活で 生活へ

S　倉橋先生は、子どもの生活についてはその自然な姿を第一に、というお考えでいらっしゃいましたが、堀合先生は、実践の中でそのことをどのように考えていかれましたか。

H　（旧女高師の）保育実習科を出た方が方々の幼稚園に出ていってくれたように、児童学科（お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座の前身）を出た方が同じように幼稚園に行ってくれた。その人たちは、こちらからいろいろ言わないで子どもの姿のままで、という「生活を生活で生活へ」をやってくれた。でも、そのころといまとでは、違ってきてしまっている。代々受け継いだ人たちが、自分でそれを理解してやっていくということができていかなかったのでしょう。というより、難しくてできなかったのかもしれませんね。

▲語り手　堀合文子先生

S　そのころといまの違いとは？

H　倉橋先生のお考えは保育実習科、児童学科あたりまでは伝わった。でも、その次の代に伝わっていない。子どもの生活ということのとらえが違うのでしょう。実際にやるには、「生活を生活で生活へ」はかなり難しい。お子さんの活動の様子は、表向き違うようには見えない。でも、違う。もうちょっと教育が入っているんです。ただ遊びが大事、遊びを中心に、お子さんの気持ちを尊重して、と言っているだけではだめで、それが実際にどうやっていくことなのか、そこのところが抜けているように思います。

S　伝え方も難しいように思いますが……。

H　正しいものを伝えていっていただきたいです。ちょっと見ると、遊びを中心にしてお子さんを尊重しているようだけど、ただ一緒に遊んでいるだけで教育をしていないところが多い。倉橋先生のお考えは、教育をするのだけれど、そのことは表には出さないで、まず子どもが生活するようにさせて、その中で教育する、そういうことです。それは、すごく勉強しなければわからないでしょうね。

S　生活で生活へ、というところが特に難しいですね。

H　そう、意外と先生の側にとっては厳しいということなんです。先生がぴっとして、頭のてっぺんから足の神経まで集中していなければできない。そこに先生がいなくても、子どもには先生が「見えて」いなきゃいけない。先生からも子どもからもお互いに「見えて」いる、そういう感じが大事です。子どもの中に入ったら、三十人なら三十人をただこぼさないで見ればいい、ということではなくて、こちらが自分っていうものを変えていかなければいけない。こちらが（子ども同士の関係の中で起こっていることも）感じ取る、その感じ方を厳しくしていくこと。そのあたりを先生は、一生懸命努力しなければできていかないでしょう。

堀合先生は、「生活を生活で生活へ」という倉橋の保育論を実践していくことは難しいとしながらも、後世に伝えていきたいという願いを強くおもちのようでした。まず子どもの生活を中心に置くこの理論は、現代の保育にどのように活かしていくことができるでしょうか。私たちはいま、堀合先生から大きな課題を受け取りつつあるように感じられました。

倉橋は、この理論を「子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくこと」[注5]だと説明していますが、現代社会を生きる私たちは、子どものさながらで生きて動く生活をどこまで保障できているでしょうか。また子どもたちも、あるがまま

の自分を生きようとする強さをどこまでもち合わせているでしょうか。子どもたち一人ひとりが安心して自分自身を表現する生活の実現から、現代の保育は取り組む必要があるようにも思われます。

そのような生活の土台があれば、子どもへの教育に先んじて、子どもが「そのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにして」おく倉橋の保育が成り立つのかもしれません。まず子どもの生活が先にあり、その中で教育が行われることを、堀合先生もお話の中で強調されました。

この、さながらの生活を成り立たせている保育者の心とは、いったいどのようなものなのでしょう。それを倉橋は、幼児の自己充実への「信頼」であるとしています。またその「信頼」は、やがて「育つものに対する信仰」という言葉に語り直され、昇華されていきます。

「幼児の生活をさながらにしておくのは、（中略）幼児自身の自己充実を信頼してのことです。[注6]」

「教育は育つものに対する信仰である。[注7]」

現代を生きる私たちが子どもと共にある時に、子どもの自己充実に信頼していると、どこまで言い切ることができるでしょうか。しかし、子どもたちが大人に信頼を寄せ、また大人からそれを得たいと思う気持ちは、昔もいまも変わらず子どもの中にあることでしょう。日々の小さな出来事の繰り返しの中で、子どもたちはこの信頼を支えに、自らの生を現在から未来へと切り開く生活をしています。大人が他者との間で育んでいくべき信頼が、子どもとの生活の中にもすでに同時進行としてあることを、保育者である私たちは自覚していたいものだと思います。

この子どもの力への信頼が確固たるものであれば、子どもに与えていきたい教育の心は、より自然なものとして子どもに受け取られていくでしょう。そのようなありのままの、そして当たり前の子どもと大人の生活を、倉橋は、「生活を生活で生活へ」という短い言葉で唱えていたのではないでしょうか。

●生活による誘導

私は三十年前に、堀合先生が担任をされていたお茶の水女子大学附属幼稚園の山の組（五歳児クラス）で、二週間の教育実習を受けました。今回のインタビューを通して、あれは倉橋の理論を具体的に学ばせていただいた体験だったのではないかと再確認する思いに至ったので、ここで取り上げてみます。

ある秋の日、園庭でひと遊びした後、部屋の様子を見ようと外靴を脱いでいた私の耳に、堀合先生が弾かれるピアノの音が飛び込んできました。私はその音に惹きつけられ室内に入りましたが、特別な活動が展開している様子ではありません。私はもっていない！　と思いました。思うが早いか私の身体は動き出し、スキップを始めました。が、動き出した直後に、子どもに先んじて動いていることに気づいた私は、ピアノを弾いている先生のほうを振り返りました。すると、先生はニコニコとほほ笑んでいらっしゃいました。しかも、私の動きを見ながらピアノを弾いてくださっていました。私もピアノに合わせるように続けていると、後についてスキップを始める子どもたちが現れました。そして、みんなで輪になりぐるぐる回る活動へと展開していきました。

この小さなエピソードは、いまも私に大切なことを教えてくれます。私はピアノの音に身体の動きを引き出されたのです。子どもに先だって動いてしまったその配慮のなさを悔いていた私に気づかれた先生は、「真っ先に動いてくれたことがよかったのだけれど、それはどういうことだったのかしら？」と保育後に聞いてくださいました。私は「先生のピアノに誘われたように思いました」と答えたことを、いまでもはっきりと覚えています。このピアノの音は、園生活に子どものような喜びを見出していた私にとって、誘導する力をもっていたのだと思います。

この誘導について倉橋は、次のように述べています。

「幼児の自発性をそこなわざらんがために、環境を

もって誘導することを必要とした。その環境は物を主としていったのであるが、それと同じ性質の位置に人が立つとき、それは生活による誘発となる。教育者自身の生活による誘導である」[注8]

堀合先生のピアノによって私は誘導され、その音と私の動きが調和して一種のリズム空間が生まれていたとしたら、そのリズムは子どもたちを惹きつけずにはいなかったのかもしれません。この時、リズムを楽しんで動けるようにピアノを弾いてくださったことが、私を「生活による誘導」へと導くきっかけになったように思います。堀合先生がご自身の実践を通して倉橋保育の誘導を直接に伝えてくださっていたに違いないと、いまの私は認識しています。

この「生活による誘導」こそ、倉橋が子どもの自発性を第一として考案した幼稚園教育ならではの教育の一つのあり方であり、また誘導保育の原点ともいえる倉橋の思想そのものでもあることを、改めて熟考してみたい思いです。

堀合　文子（前十文字幼稚園主事）
佐治由美子（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）
記録・今井麻美（お茶の水女子大学大学院生）

注

1 経歴については、立川多恵子著「堀合先生に学ぶ(5)」『幼児の教育』第九十二巻第八号に詳しい。

2 敗戦により教育制度が改革され、一九四七年の学校教育法は幼稚園を学校の一種と規定した。そのため幼稚園保母はこの後幼稚園教諭と呼ばれるようになった。

3 この共同研究については、立浪澄子著「倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの実践研究の歩み」『幼児の教育』第一〇八巻第十二号に詳しい。

4 倉橋惣三著『幼稚園保育法眞諦』東洋図書一九三四年　P.4（倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館　二〇〇八年　P.5）

5 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』P.24

6 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』P.31

7 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館　二〇〇八年　P.10

8 倉橋惣三選集3『就学前の教育』フレーベル館　一九七五年　P.435